

尚本稿を草するにあたり資料の提供や有益な御助言を賜った大前晋・菅原昭夫・三木安貞・米村和繁・尾崎勇の諸氏に深くお礼申し上げます。

#### 参考文献

関西蜻蛉談話会(1977)近畿地方の蜻蛉トンボ科  
相坂耕作(1977)アカトンボ・風物誌(161)山陽ニュース  
大前 晋(1979)夢前川下流周辺の蜻蛉相 市立科学館  
資料  
相坂耕作(1980)姫路市の昆虫 てんとうむしNo.6

(S.05 : Kousaku Aisaka 姫路市 )

## 12月に羽化したシルビアジジミについて

広畑 政 己

本種は幼虫越冬をするということは周知の通りであるが、4月下旬に1化の個体が発生してから晩秋までだらだらと発生が続くので、冬を迎える時点では様々な形態であろうと思われる。

このように決った越冬形態を持たない種は、越冬できる形態で冬を迎えた個体だけが生き残るものと思われる。そして本種の場合は幼虫という形態が最も適しているようである。しかし、県下に於て4月9日という早い記録もあるので、この記録などは蛹越冬を示唆するものとして注目していた。もしかすると蛹で越冬するのではないかと思ひ、野外にて実験を行ったが、結局越冬させることはできなかった。

この蛹は上郡町上赤松産の2頭の蛹で、10月29日に蛹化したので野外で放置していたところ、12月21日に翅の縮んだ1♂が羽化していた。もう1頭の蛹は、1月中旬まで生きていたが、その後黒く変色をして、羽化には至っていない。

12月に入ると最低気温が0℃以下の日も多く、羽化した個体は0℃以下の日を7日も経験したことになり、蛹でもかなりの耐寒性があるようである。

1980年の12月は、1日から12日までは最高気温が10.3℃～17.1℃と高く、16日から19日まで10.7℃～12.7℃と10℃を上まわっている。羽化した個体は10月28日に蛹化した後、11月12日と経過する間に、羽化に必要な温量が累積され、羽化したものと思われるが蛹の耐寒性や羽化と温度との関係など参考になればと報告した。

(S.28 : MASAMI HIROHATA 姫路市 )

## カラスザンショウを 食べるキアゲハ

唐 士 洋 一

1981年10月のこと、キアゲハの終令幼虫をつけた、バセリとミヤマカラスアゲハの若令幼虫をつけたカラスザンショウとを、都合により飼育ケースに雑居させていたところ、バセリの葉がまだ残っているにもかかわらず、キアゲハの幼虫の一部がカラスザンショウを食べているのではないか。

カラスザンショウはミカン科の植物でもあり、代用食として使えるのではと思ひ、さっそく野外にてニンジンについていた若令幼虫を採集してき、カラスザンショウにつけてみたところ同じく食べ始めたではないか。ミカン科のキハダにつくことがあるとは聞いていたが、カラスザンショウを食べるとは思ってもみなかったので、おどろくことしかり、試みに①キハダ、カラスザンショウとを同一ケースに入れてみたところ、キハダを食べないでカラスザンショウのみを食べていた。

②若令幼虫からカラスザンショウを食べさせ途中でバセリを入れてやった場合、バセリを食べない傾向にあった。現在、そのまま発育成長してサナギになっている。どんな成虫が羽化してくるか楽しみである。

なお今回の試みはわずか数例ではあるが、全ステージカラスザンショウでも飼育可能であることを確認したので報告しておく。



写真・カラスザンショウを食べている幼虫

(S.18 : Morokoshi Youichi 相生市 )